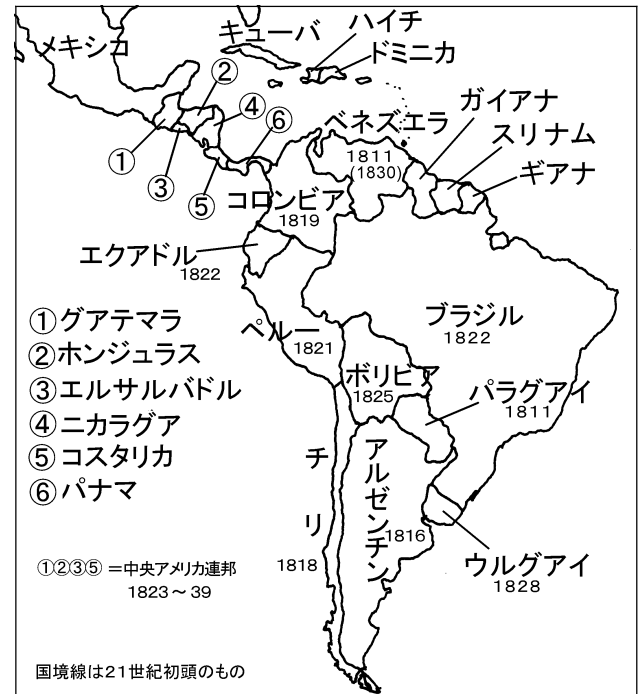


## ラテンアメリカ諸国の独立

19世紀初頭のラテンアメリカはほとんどが【1: 】の植民地である。ブラジルは例外的にポルトガル領。カリブ海には英仏の奴隷制砂糖プランテーションが展開していた。アメリカ独立戦争、フランス革命、ナポレオン戦争という北アメリカ、ヨーロッパの激動と混乱は、ラテンアメリカにも大きな影響と独立のチャンスを与え、1804年から1825年までにカリブ海地域を除くほとんどの地域が独立した。カリブ海地域でもイスパニョーラ島西部では独立運動が起きた。



### I ハイチの独立

カリブ海地域

- 1) イスパニョーラ島西部は1697年以降、【2: 】の植民地でサン=ドマングと呼ばれ、砂糖生産で栄え黒人奴隷の数が増加していた。この地で、1791年、フランス革命の影響を受けて黒人奴隷の蜂起が起きた。これをサン=ドマングの蜂起という。指導者は「黒いジャコバン」と呼ばれた黒人奴隷出身の【3: 】1743-1803。
- 2) 1794年、フランス国民公会、奴隷制度廃止を宣言。しかし、その後ナポレオンが奴隷制を復活させた（1801年）。
- 3) 1798年 トゥッサン=ルヴェルチュールは侵入してきた【4: 】軍を撃退、1801年、全島の支配権を握り、終身総督となり、事実上の独立を宣言、憲法を制定した。
- 4) 1802年 利益の大きい植民地の回復を目的に、【5: 】軍（指揮官は義弟のシャルル=ルクレール）がサン=ドマングに侵攻した。味方の裏切りが相次ぎ、トゥッサンは停戦協定を結んだが、家族共々捕えられた。フランスへ護送されたトゥッサンは監禁され繰り返し拷問を受け、1803年4月7日肺炎で亡くなった。
- 5) 数ヶ月の間、イスパニョーラ島はナポレオン軍の支配の下で平穏であった。しかし、フランスが奴隷制を復活させようとしていることが明らかになると、反乱が起きた。フランス軍はイギリス軍の海上封鎖によって勢いを弱められた。ナポレオンは要請された大量の援軍を送ることを躊躇した。ナポレオンは1803年4月にアメリカ合衆国にルイジアナ植民地を売却するなど、西半球における事業に対する興味を失っていった。
- 5) 1803年、反乱軍はフランス軍を打ち破った。1804年1月1日デサリーヌらは、イスパニョーラ島東部のサントドミンゴ（現在はドミニカ共和国）も併せてハイチの独立を宣言した。これを【6: 】と言う。【6】により、近代史の中で初めての黒人の共和国としてハイチが建国された。アフリカ人とアフリカ人を先祖に持つ人々がフランスの植民地統治から解放されただけでなく、奴隷状態からも解放され全土を恒久的に解放できた。ただし、多数派の黒人農民に対し、ムラートなどの少数派エリートが政治も経済も支配した。
- 6) サン=ドマングを失ったことはフランスにとって大きな打撃となった。ラテンアメリカに植民地を持つ西ヨーロッパ諸国は、このような運動が他の植民地にも広まることを恐れて、独立を目指す植民地の白人指導者と妥協した。

### II ラテンアメリカ諸国の独立

- 1) ナポレオンがスペインを制圧すると、スペインの植民地のベネズエラで、指導者【7: 】1783-1830は、1811年に共和国政府を樹立したが、弾圧された。奥地で体勢を立て直し、1819年に（大）コロンビア※を樹立し大統領に就任。彼は1822年にエクアドルを解放し、1830年のベネズエラ独立にも貢献、ボリビア独立にも貢献、ボリビアという国名は【7】の名をとったものである。この間、彼は1826年、パナマ会議を開いたがこれは不調だった。11M.09M



※ 正式にはコロンビア共和国。現在のベネズエラ、コロンビア、エクアドル、パナマの全域と、ガイアナ、ブラジル、ペルーの一部に相当する。目的は結束してスペインと戦うこと。内部対立で1831年に解体。

パナマ会議は、新しく独立したラテンアメリカ諸国の平和と独立を維持するため、相互防衛同盟を結成するために開かれた。参加国は大コロンビア、メキシコ、中央アメリカ連邦、ペルーの4カ国。相互防衛条約が締結されたが、大コロンビアの議会しか批准せず、相互防衛の枠組みは成立しなかった。これを受け継いだ十数回の国際会議が開催され、それらを引き継ぐ形で、1889年、【8: 】で、第1回パン=アメリカン会議が開催された（大統領はクリーヴランド）が、アメリカ合衆国の外交の道具としての面が強く、シモン=ボリバルの精神とはかけ離れている。この中で、1947年、リオデジャネイロでリオ協定が結ばれた。これはアメリカ合衆国を中心とした集団安

- 全保障条約である。1948年の第9回パン=アメリカン会議（ボゴタ会議）で【9: \_\_\_\_\_】(OAS)が設立された。これは、南北アメリカ21か国による反共協力組織。カリブ海地域での社会主義運動や革命を抑える役割を果たした。
- 2) 1816年にアルゼンチンは共和国としてスペインからの独立を宣言。軍人(アルゼンチン出身のクリオーリョ 09M)の【10: \_\_\_\_\_】1778-1850らが活躍、独立軍は1824年に国王派の軍に圧勝して独立を確定。なお、【10】は1818年、チリ、ペルーの独立にも貢献した。
- 3) メキシコでは、司祭の【11: \_\_\_\_\_】1753-1811らに率いられたインディオやメスティンが蜂起したが、これを鎮圧したクリオーリョの現地当局は、1821年、スペインからの独立を宣言し、1824年には三権分立を含む連邦共和国憲法まで制定した。その後、アメリカ合衆国との戦争1846-48で国土の半分を失った。  
メキシコってラテンアメリカなのだろうか？ 地理的には北米だが、歴史的にはかつてスペイン、ポルトガル、フランスの植民地支配下(皆ラテン語から派生した言語を用いる)におかれていた地域をラテンアメリカと言う。従ってメキシコを含み、それより南はラテンアメリカ。
- 4) ポルトガルの植民地の【12: \_\_\_\_\_】では、ナポレオン戦争中、王室が避難してきていた。1822年、ポルトガル王子が【13: \_\_\_\_\_】として独立を達成した。ブラジルは独立当時帝国だった！

## ラテンアメリカ諸国の独立を可能にした諸条件

- 1) シモン=ボリバル、軍人サン=マルティン、司祭イダルゴらは、《植民地生まれの白人》のリーダーだった。彼らは【14: \_\_\_\_\_】と呼ばれ、白人でありながら、任期が終わればお土産を持って帰国してしまう無責任で高圧的な本国派遣の官僚に大きな不満を持ち、独立運動に挺身する者もいた。なお、「カウディーリョ」は、**独立戦争で活躍し発言力を強めた軍事的指導者**のこと。
- 2) このようなラテンアメリカ諸国の独立は、ウィーン体制の立場からは許し難いものであり、また、オーストリアはハンガリーを支配する複雑な複合民族国家であり、ラテンアメリカの独立運動の国内への波及を恐れ、宰相メッテルニヒは、ヨーロッパ列強を束ねて干渉しようとした。ところが、なんと**イギリス外相【15: \_\_\_\_\_】**08J.09Chは**独立を事実上容認**した。それはラテンアメリカ諸国独立によるスペインの実力後退に期待したからである。
- 3) アメリカ合衆国大統領【16: \_\_\_\_\_】は、1823年に**モンロー宣言**を発し、ラテンアメリカ諸国の独立を**事実上容認**した。その背景にはアメリカ=イギリス戦争1812-14がある。  
**モンロー宣言**は南北アメリカとヨーロッパ諸国(ロシアも含む)との相互不干渉を主張した。以後、アメリカの伝統的な外交姿勢となり約70年も続いた。アメリカは1890年ころから太平洋進出を進め、1898年の米西戦争、ハワイ併合で事実上モンロー主義は破棄された。「モンロー主義の破棄」とは「アメリカ合衆国の縄張り」は南北アメリカ大陸にとどまらない。」ということである。その後さらにアメリカ=フィリピン戦争、中南米各国に介入する「棍棒外交」へと続いていく。モンロー主義は破棄されてもその延長上にあった「孤立主義」は残り、ヨーロッパでヒトラーがどんなに猛威をふるってもアメリカはリスクを伴う「干渉」をしなかった。それは1941年末(日本の真珠湾奇襲攻撃)まで続いた。なお、「モンロー宣言」はもともとアジアは対象としておらず、アメリカはアジアに進出する権利を留保・行使している。
- 4) ちょうどこの時期は、奴隷貿易が各国で禁止された時期でもある。  
ヨーロッパの革命の原理となった啓蒙思想や《キリスト教人道主義》などの影響もあり、また、サン=ドマンゴの奴隷蜂起が奴隷の持ち主たちを震撼せしめたことも大きい。  
1807年 イギリス議会、奴隷貿易禁止を決定 / 1808年 アメリカ、奴隷貿易禁止に向かう  
【17: \_\_\_\_\_】禁止の歩みが踏み出されただけで、**奴隷制度そのものの廃止は、まだ話題にさえなっていなかった！**  
奴隷制廃止は1833年(ホイッグ党グレイ内閣)。仏では1848年、米では1865年。

## ラテンアメリカの近代化

- 1) 独立は達成され、奴隷解放など社会改革を行ったが、極端な貧富の差があり、政情は不安定であった。  
ブラジルを除き、多くの国で共和政が採用されたが、実際にはクリオーリョの大土地所有者や地域ボスなど少数の有力者による寡頭政治であった。また、チリとブラジル以外の国では、独立戦争で力をつけた軍事的指導者、カウディーリョたちの抗争が続き政情は不安定だった。
- 2) ラテンアメリカでは、1870年代には多くの国で経済的安定に向かった。しかし、この経済発展は、バナナ、コーヒー、硝石などの輸出用作物や資源の採掘によるもので、資本も欧米、特に**イギリス資本に大きく依存し、イギリスへの経済的従属が強まった**。イギリス流の自由貿易が貫徹する中、ラテンアメリカ諸国は原料や食料をイギリスを中心とする欧米諸国に輸出し、それらの国から工業製品を輸入した。そのため工業化は大幅に遅れた。少数種の商品作物や鉱物資源に依存する【18: \_\_\_\_\_】の状態となり、気候の変動、病虫害、国際価格の変動などの影響をもろに受け、国民のための食糧生産は常に不足傾向にあった。
- 3) 先住民に対する土地収奪が進み、インディオの生活はいっそう悪化し、彼らの共同体は大きく揺らいだ。しかし、彼らが受容させられた【19: \_\_\_\_\_】信仰の底流に、彼ら独自の世界観、文化は民族文化として流れ続けた。アフリカ大陸から連行された奴隷も出身地の文化を伝えた。欧米やアジアからの移民も彼らの文化を持ち込んだ。こうして、ラテンアメリカには独自の活気ある文化が創出された。  
①ペルーの文化運動「インディヘニスム」……インディオ文化の復権をめざした！  
②「クレオール化」……ヨーロッパ文化を土台とする。
- 4) カリブ海地域では、黒人奴隷制の廃止後、インドなどから労働力の導入が行われた。
- 5) ブラジルでは、帝政と奴隷制が存続した。コーヒー栽培が盛んになると、移民労働者が増えて奴隷が解放され、その影響もあって、1889年に帝政も崩壊して共和政国家となった。